

鉄舟の襖

入来院 貞子

鉄舟の間に独り座しその夢を

『茅門のある町から―貞子の徒然草』より
(高城書房、平成二十四年五月二日初版発行)

我に託せし祖父母を偲べり

「欲しいものがあつたら、何でも持っていって」

遺産相続の件が一応けりがついたのだと電話で弟が言った。このことについては私は全く蚊帳の外であった。遺言だという書類を送ってきてあつた。母の遺志ということであつたが、もう記憶もさだかでなかつた頃の母の遺志とは何だろうと思つていた。

私は長女で五人の弟妹がいるが、養子を取つて父の事業を継いだ妹が十五年前に他界していった。その養子や長男である弟、嫁ぐこともなく父母の世話をしてきた画家の妹など複雑でもあり、私はひたすら黙認に徹してきた。弟妹たちを庇護してきた長女のプライドが弟妹と確執を起すことを拒んだ。

父が「何とか消さずに続けてくれ」と切望していた「全戦没者の慰霊」という父の半生を賭けた重い荷は、夫や三男と共に引き継いで頑張っている。

「鉄舟の書が欲しいわ」

私は率直に言った。前々から土蔵にただ丸めて保存されていただけの屏風用の六枚の書を、我が家の襖にしたいと思つていた。

「いいよ、価値を認める人が持つていけばいいさ。直ぐ送らせるよ」

弟もあっさり答えた。外見は私の兄に見えるほど老けた弟の苦笑している顔が浮かんだ。長男の重圧が神経質の弟を苛んできたのかもしれない。

四、五日して信州の妹から宅急便が届いた。六本の仮軸に止められた鉄舟の書であつた。早速経師屋さんと呼ぶ。座敷に並べて広げると流石鉄舟の書。

「襖は勿体ないでしょう。屏風にしてはどうですか」

経師屋さんも言う。私もそう思つた。

昔強制疎開で壊された前の家の座敷に、何かあれば立てられていた一対の屏風があつた。山水画の周囲は金箔で、見事だなあと子供心に眺めたものだったが、戦後建てられた家は八畳六畳が主で二度と屏風が立てられたことはなかった。そしてそれも人手に渡ってしまった。

屏風は場所を必要とするし、品物となると保管も考えねばならない。襖は家の一部であるし、いつでも目にすることができる。

経師屋さんが抱えて帰つて二週間が経つた。ある夕方巡査の訪問があつた。近所にこそ泥が

入ったと言う。

「この所、麓地区の盗難が多いんです」

若い巡査はうんざりした調子である。私は俄に預けた書が心配になった。火事ということもあるかもしれない。しかし夫に何を心配するのかと笑われてしまった。考えてみれば経師屋さんはこの校区の消防の分団長だった。

注文した縁の布がなかったとのことで再度サンプルを見て色柄を決めた。取り払われた襖に夜の寒さが身に沁みるようになったある朝、経師屋さんが意気揚々と運んできた。

玄関の前の十畳間はコの字型に三面襖である。書の張られた中央の二枚は開くと両端の襖に隠れる。金茶色の布地も落ち着いた雰囲気ですぐに入った。

夜、全ての襖を閉じて独り座り、静かに眺めてみる。勢いよく曲がりくねった字は何が書いてあるのかさっぱり読めない。ただその清冽な気迫が私の心を洗い清めてくれるようだ。

そして眼を閉じれば、祖父母の愛情に包まれて過ごした幼い日々の思い出が彷彿としてくるのだ。

同じ兄弟でも長幼の序がもたらす不公平はどうすることもできない。下の二人の弟妹は祖母を全く知らないし、祖母の亡くなった時は弟も学齢に達していなかった。

初孫として特に祖母は私を可愛がってくれた。親戚の人の話では自慢の孫であったそうであ

る。そして私が学齢になった時、祖父母は「貞子にも故郷が必要だ」と言って、私一人を連れて東京から信州に戻ったのだった。

その直前祖父は、

「貞子に見せておかねばならない」

と言って、東京の三カ所を巡った。皇居前にあった楠木正成の銅像、乃木大将の家、泉岳寺の赤穂浪士の墓であった。いずれも忠義に命を捨てた人だ。如何にも明治の人らしい選択である。

今ここに私は祖父の秘蔵の鉄舟の書に囲まれている。それらの書が、

「ああ、やっと落ち着けたよ」

と語りかけてくるような気がする。そして祖父母と父母の満足気な慈眼さえ感じる。

「世のためになる人間になれ」

というのが彼らの遺訓である。価値観もすっかり変わった今、厚い障壁に何度もめげそうな私だが、この書から凛々とした勇気を貰おうと思っている。

入来院 貞子 (いりきいん ていこ)

昭和8年 長野県諏訪郡上諏訪町に生まれる。

昭和28年 県立諏訪二葉高校卒業。

昭和31年 入来院重朝と学生結婚。

昭和33年 早稲田大学卒業。

昭和45年 日本電算機総合学院を修了後、富士電機株式会社東京工場事務管理室に嘱託勤務。

平成5年 全労済システムズを定年退職。

平成6年 夫の故郷入来院に移住。入来院花水木会代表。朝河貫一研究会理事。鹿児島市日中友好協会理事。文芸誌「火の鳥」「ゆうすげ」歌誌「にしき江」同人として活躍。

平成23年 逝去。法名 文珠院朝室慈貞清太姉。